

クリート考古學

J. D. S. PENDLEBURY 著

J. D. S. Pendlebury: The Archaeology of Crete, An Introduction, London, 1939.

「私はこの書において最古の時代からローマ時代に至るクリート文化について、幾らかの敘述を試みてみた。」と冒頭に述べてゐるが、更に先史時代の記述について——この書の三分ノ二を占める——彼の意圖したところは次の如くである。エヴアンス卿の「ミノスの宮殿」Palace of Minos なる大なる著書があるが、これはクノッソスに限つてゐるし、また發掘の進捗に伴つて著されたのであるから、(第一巻は1933、第四巻1938)新しい發見を處分するのに無理がある。歴史的な順列に取扱ふことが必要である。之に對しグロッツのエーゲ文明史(G. Glotz, La Civilisation égéenne 1923, Aegean Civilization 1925)の方法は建築、陶器、社會組織等々といったやうに部門によつて分つて、他の部門とは無關係にそれだけの發展を説くが故に、一定の時代の文化を明確に捕へることができない(序論)と。

それで著者の目的は歴史的に一定の時代々々の文化を敘述する事なのである。そしてこの書は飽く迄も An Introduction なのである。一つの概説、それはまことに良心的な便利な序説である。クリート文明が發見されてから正に四十年、眼ほしき地方は多く發掘されたやうで、もう此迄の成果をまとめて、括した書物が生

れてゐる時期であつた。グロッツの他、Dussaud, Hall, Fimmen, Bosert、やや小にしては Hawes, Waltz、などの總説的な諸著があるが、凡てを通じて過度に系統ならんとするために、考古學的成果に對する考量が不充分だつたり、それらに議論の餘地を残して、今日のクリート考古學の全貌を不充分にしか示してゐない。

この時、ペンドルベリーは斯様な書を著すに最も適した一人である。アテネ英國考古學會から派せられて、數年前迄五ヶ年間もクノッソスにあつて、その發掘に従事し、其後も此島に、埃及に發掘に従事した彼は、飽く迄も考古學者であるのは言ふまでもないが、同時にクリートの地理、生活の精通者である。彼はさうに Handbook of the Palace of Minos at Knossos 1933 を書いたが、彼の經歷とこの書とが充分にこの新書の特徴をあらはしてゐる。即ち飽く迄に即物的に、隱微に、獨斷を極度にさけてゐる。この點グロッツと對照的である。例へばグロッツが見事に描いてゐる社會組織(殊に clan)について、此説は甚だアトラクティヴだが、それを支持すべき證據がないと斥けてゐるやうに(二七九頁)或は非常に内氣な宗教の敘述のように(二七二頁)。それ故にもし此書において獨斷的な解釋や推定を期待すれば、その人は落膽するであらう。しかしこの書を An Introduction として、殆んど萬人妥當の結果からのみ組み立てられたクリート考古學の全貌を描へんとする人には最良の書である。そしてこの書から出發して、他の諸種の發掘報告とか著書とかを讀む時、その讀

むところが正しき地位において理解されるであらう。と言へば座右に置いて顧みるべき提要の如きでもあらうか。

このことは内容の分析的な提示が最も明かに示してゐる。初期、中期、後期、ミノア時代を更に三分して、各期毎に必ず、建築、フレスコ、陶器、金工品、印章等から外國關係、クロノロジーの順に述べられてゐる。それ等は何れも説明の程度を出でないが、その大部分をこの書のために書いた各期の家屋の原面圖二七と、各期の文様集一七とは特色であるが、それより大なる特色は發掘發見地點を各期毎別々に記した地圖二四とこれも各期毎にまとめた發掘發見地名表八〇餘頁であらう。この地圖も地名表も適宜に散布してはあるが、此等だけで全書の四分之一に當り、ここに著者の眞摯と親切とを充分に見ることができよう。此外、寫真四十三頁この内には多くの景觀圖を含んで、現代クリート人やその風俗を古代と比べてゐる所二六七頁などと共に、流石に長く此島に住んで、此島を愛した彼の傾向を示してゐる。

ミノア時代以降については、この時代にはクリートはギリシア文化圈に屬してゐたがために、ただそれの地方的特色を記するに止める(序論)とて、多くの表や地圖ともで僅か八〇頁を、ミノア時代と同じ順序の書き方で充してゐるのは、もう少しギリシア文化との關係もあればと、一寸物足りないが、本書の一貫した記述法にはかなつてゐる。

全體を通じて新論卓説はないが、問題となるのは年代であらう。ミノア時代の年代設定は主として埃及との關係によるものである

が、此時埃及學者でもある彼は甚だ好都合である。恐らく各期の外國關係と年代及び三〇一頁の對照年表とは彼の積極的な考が入つてゐやうが、それとても甚だ慎重で、クリート島を東、中、西部に區分して、甚だ妥當な結論を出してゐる。しかし妥當は次第に妥協を許して、區分が錯綜する憂があるから、彼が望む如くに(序論、またその三十一頁參照)新なる原理による年代の出現が望まれるのである。

何はともあれ、堅實と滋味とがこの書の讀後感であり、一定の時代の文化の概述といふ彼の目的は充分に、そしてたしかに此迄のどの書よりも達せられてゐる。そして次にこの尙ほ春秋に當む著者に期待するのに、この最良の *An Introduction* の後に來るべきものである。(Methuen & Co. London. p.p. 400 (邦價貳拾八圓五拾錢) (村田數之亮)

一七八九年の大恐怖

G・ルフエーブル著

Lefebvre, G.: La grande peur de 1789

Les paysans du Nord pendant la Révolution française (1924)の著者として令名既に高く現にバリの文科大學の教授としてマチエなき後の革命史研究を雙肩に荷負ふ著者は一九三二年本書を公刊する事により、日進月歩の革命史研究に新天地を開拓したのであつた。